

明治三十四年の川上音二郎

——国内諸地域における帰朝公演の考察

はじめに

川上音二郎は第一次海外巡業（明治三十二年四月～同三十四年一月）から帰国し、第二次海外巡業（明治三十四年四月～同三十五年八月）に再渡航するまでの約三か月間、大阪朝日座、神戸相生座、東京市村座、横浜羽衣座、京都南座、大阪中座、長崎舞鶴座で公演を行った。これら一連の巡業に關してはつぶさに検討されておらず、稿者は先行研究を整理した上で、帰国直後の朝日座における新演劇大合同について考察した。^{〔1〕}本稿では前稿に続き、白川宣力編著『川上音二郎・貞奴―新聞にみる人物像―』（雄松堂出版、昭和六十年）、国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表』の「大阪篇」第三卷（八木書店、昭和六十三年）と「京都篇」第三卷（同前、平成九年）にも依拠しつつ、同時代資料に即して神戸から長崎までの帰朝公演の実態を明らかにする。なお新聞記事は基本的に明治三十四年のもののため年数は省略、引用文中の「」は引用者による注記である。

朝日座公演（一月三十日～二月三日）を終えた五日後、二月八日に神戸相生座の初日があく。二月八日付『都新聞』は、相生座前の風景をこう伝えている。

一 神戸相生座から東京市村座へ

後藤隆基

劇場にてハ前に高さ十五間巾二十間の一大アーチを造り正面に果実を以て現はせる九枚笹の紋を彩り其前に三千燭のアーチ燈を点じ其前に日章旗一对、大屋根より四方へ各国の国旗を張り詰め五色の吹流しを樹て劇場の前面は大阪十合呉服店の製造にかゝる白赤青の紙帳を以て一面に覆ひ右手に豎六尺巾五尺の、ろ色縁金枠の大額へ「川上派新演劇」と中央に記し右に「一番目洋行中の悲劇」左りに「音二郎優及帰朝一行出演」と記し左りに同じき額面に空中に於て軽気球上の格闘を画きたる一枚看板上部に「武士的教育」の芸題を記し茶屋は一体に九枚笹染抜の暖簾を掲ぐるなど高尚な飾付ハ未だ曾

て京阪神にハ見ざる程なり

東京から長谷川勸兵衛が出張して大道具を担当し、書割と劇中で使用された油絵は西洋画家の高橋真砂雄が筆を揮った（梨園叢話『都新聞』二月八日）。相生座は「棧敷十一円五十銭といふ同地空前の直段なるにも拘らず満場立錐の地なき大入」（無署名「神戸に於ける川上演劇の景況」『読売新聞』二月十二日）で、初日には「知事市長其他銀行会社の紳士連の顔も見受け連日西洋人支那人等の見物最も多し」（同前）と報じられている。

朝日座のラインナップは「洋行中の悲劇」と「英國革命史」だったが、後者に代わって相生座で上演されたのが「欧米にて有名なる「グレート、ルビー」「アリゾナ」「アキシユム」の三種の劇から其の粹を抜きて」（川上新派／演劇武士の教育（上）」『神戸又新日報』二月八日）② 広岡（彩霞園）柳香が脚色したという「武士的教育」である。その内容はこれまで未紹介のため、二月七日付「神戸又新日報」掲載の役割一覧、八日及び九日付同紙掲載の筋書をもとにあらすじと主な配役を一瞥しておく。

舞台は旧幕時代の北海道札幌。軍用軽気球の開発に勤しむ屯田兵の陸軍一等軍曹桜田雄吉（川上音二郎）は、上司の陸軍大佐樺島輝忠（松本政雄）に援助を乞うが、陸軍少尉荒川晋（佐藤歳三）③らの妨害を受けている。同地では未亡人の福浦みち子（藤澤浅二郎）が娘たみ子（加藤瀧三郎）と暮らしており、みち子と樺島大佐は不義の関係にある。荒川はたみ子との結婚を樺島に願い出ているが、望みは果たされていない。

桜田は職務の傍ら、炭鉱主で資産家の占部道夫（藤川岩之助）

の元で会計番頭を務めている。占部の娘初子（福井茂兵衛）は洋行婦りのハイカラ令嬢。病に臥せている父の部屋の隣室で自転車の練習をしたり、周囲に西洋文化を広めようとするが、桜田はそんな初子と屢々議論になる。ある日、初子が教会へ行くと、桜田も軍事上の測量のために教会の閣上にいた。日没になって教会が施錠され、二人は閉じ込められてしまう。初子から、自分を口説くために扉を閉めさせたのだろう、結婚を申し込んでみようが相応の財産がなければ承知しない、などと侮辱された桜田は潔白を示すために五階の窓から飛び降りる。

桜田は士族の子として育てられたが、病床の占部から、桜田の父は奥州某藩主で、台湾で大地主となって財を成したが暴徒に殺害されたと聞かされる。占部は桜田の父から五万円を託され、その金で現在の地位を築いた。本来それは桜田に渡すべき金で、今はロシアにいる銀行家に遺言状と共に預けてあるから受けとるよ、うに言い残し、占部は息絶える。

日露関係の悪化に伴って北海道に砲台建築の命令が下り、屯田兵は工事に従事、女性陣も賄方として現場に出張している。そこへ行方不明だったみち子の元情夫畑島権七（津阪幸一郎）が現われて金を強請るので、みち子は樺島が預かる官金から百円を抜き取って畑島に与えてしまう。現場を目撃した桜田はみち子を糾弾。樺島が帰って来て事が露見するが、桜田はみち子の哀願をきいて罪を被り輜重輪卒に降格される。みち子は娘に桜田との結婚を勧め、たみ子も承諾するが、荒川は嫉妬から桜田と格闘になり、その様子を見ていたみち子は桜田を救うべく樺島の短銃で荒川を撃つ。桜田はその場で捕縛されるが、取調べが進むなかでみち子が

すべてを自白して桜田の冤罪を晴らす。樺島は桜田の縄を解いて復職させ、軽気球開発にも助力を惜しまないと誓う。

桜田は軽気球の試験飛行を行うが、荒川が畑島を使って妨害しようとする。気球は地面を離れ、しかし綱に縋りつく畑島を桜田は空中で斬って捨て、無事に東京までの飛行を成功させる。北海道へ戻ると、桜田はロシアから帰国した銀行家から五万円を受けとり、また初子からの求婚を刎ねつけ、たみ子と結婚するところで大団円となる。⁴⁾

「武士的教育」は『英國革命史』よりハ非常に俗受のするものにて今日の見物の程度としてハ先づ上乘の芝居といふべし」(無署名「神戸に於ける川上演劇の景況」『読売新聞』二月十二日)と評され、以降の土地では主要演目に据えられていった。

市村座は二月十八日初日、二十六日千秋楽。神戸と同様に「洋行中の悲劇」と「武士的教育」が上演される。帝都の好奇心は、洋行帰りの音二郎が「如何なる新生面を開くべきや」(無署名「市村座川上演劇」『都新聞』二月二十二日)という一点に注がれた。

市村座公演は、松本伸子『明治演劇論史』(演劇出版社、昭和五十五年、四二五～四二九頁)が、杉廣阿彌「予と壮士劇」(『毎日新聞』二月二十～二十二、二十四日)や松居松葉「川上音二郎を見る」(『萬朝報』二月二十一～二十三日。署名は「ま、ま、ま」)をもとに検討しているように多くが批判的で、廣阿彌は、川上一座が「在来歌舞伎の糟粕を舐めたる」(二月二十日付前掲評)ような演目を欧米で上演したことも組上にのせて論難した。伊原青々園は「新聞劇評の彼に対する態度は甚だ面白くない」(『東京

に於ける川上音二郎(上)』『大阪毎日新聞』三月十一日)というもの、しかし舞台については「在体に言へば是れ極めてプリアなるものなりき、脚本は依然たる従来の川上芝居の脚本なりき、技芸また依然たる川上芝居の技芸なりき、彼れ自身も、また其の座員等も」(『帰朝せる川上音二郎』『歌舞伎』明治三十四年三月)と述べ、強いて洋行の成果を見るならば以下の八点を挙げる。

- 第一、合方の囃子を鮮くせる事、第二、上下の出入を鎖して大かた奥(舞台の正面)より登場し又退場する事、第三、力めて花道を用るざる事、第四、フットライトの瓦斯を廢して電灯の多数を点ずる事、第五、開演中は土間を暗くし舞台面の大いに明るくなりし事、第六、色電気の反射によりて夕陽の景なるを現はせる事、第七、書割の稍洋風となれる事、第八、川上自身の顔を粧ふに洋式の顔料を以てせる事

他にも「舞台の室内等は表面より見る日本流を総て内部より見る構造に改め(…)幕間の前には必ず洋楽を用ゆるのと開演の際黒坊(黒衣)の如き目障りとなるべくものは一切舞台に出さざる」と(…)壮士芝居に珍らしい殺傷の少ない」(無署名「洋行帰りの芝居(市村座の川上演劇)」『報知新聞』二月二十日)点を特色に挙げる記事もあった。しかし、青々園はそれらを「枝葉の改革」(『帰朝せる川上音二郎』前出)として価値を見いださず、音二郎の「長所は其の舞台にあらずして其の世衆に対する方面にあり、されば彼が外遊の影響は寧ろ技芸の側よりも營業の側に於て現はれんか」(同前)と総括している。

誰もが〈洋行土産〉への期待値と実際の舞台形象との落差に失望をかくさず、音二郎批判の空気が色濃い東京の劇壇にあつて、擁護にまわつた者の一人に江見水蔭がいる。水蔭は「僅か一年足らず彼地に往つて居たからと云つて、然う急に上手になるものではない。又川上の目的が技芸の上に一進歩を得やうと思つて、彼地へ行つたのでもないので、彼は観察者ではない、観察されに行つたのである」(俳加羅生「川上と貞奴」『太平洋』三月四日)と述べており、土肥春曙もまた「彼の技芸は、欧米に於て元より日本を代表するに足らざりしも(…)俳優としては曾て前例を見ざる世界漫遊を企て、演芸美術の尊敬さる、文明諸国の風に吹かれて亦漫散複雑なる日本の頭脳を多少一新し来れるも喜ばしとせざらんや」(川上が物語の後に)、金尾種次郎編「川上音二郎貞奴漫遊記」(金尾文淵堂、明治三十四年)と記す。

欧米の観客による川上一座の称揚はひとえに貞奴の存在に負うが、第一次海外巡業以前はもちろん、帰朝後も貞奴は舞台に立っていない。東京の観客は、川上一座が欧米で評価された最大の理由を見ておらず、問題化されるのは常に音二郎の技芸や演劇観である。こうした問題を考えるとき、川上一座に対する国内外の評価のずれは留意する必要がある。

とはいへ、大阪や神戸同様に市村座は連日大入で、竹の屋主人こと饗庭篁村は「千辛万苦を経て海外を巡り来りし程ありて川上の技芸も精神入り壯士演劇の一進歩見えて悦ばしき事なりし」

(「川上一座」『東京朝日新聞』二月二十三日)と礼賛した。後年田村成義は「川上帰朝以来新聞社の運動怠りなく盛んに黄金をまさきちらしたる結果にや各新聞の態度は大いに一変し」(『続統歌舞

伎年代記・乾之巻』市村座、大正十一年、八九三頁)と記す。千秋楽の前々日、音二郎は舞台上で観客に向かって新聞の劇評を読み上げて演説を打つたが、教社の記者を招待しそびれたために記者があてつけて酷評を書いたのだと後日語つている(無署名「川上音二郎と二時間」『京都日日新聞』三月五日)。スキヤンダラスな側面も多分に散見するが、音二郎のメディア対策は従前来的のものであり、今日的視点からみれば、むしろ広報戦略の積極性や、新時代のメディアである新聞社との関係重視という姿勢は音二郎の特質として評価すべきであろう。

二 京都南座と大阪中座

市村座の後、川上一座は、横浜羽衣座(二月二十七日〜三月一日)で公演を行った。白川前掲書の年表によれば、演目は市村座と同じだったようだが、雑誌「歌舞伎」(明治三十四年四月)の投書欄に「散々の不入(商館ボオイ)」とあり、評判の一端が垣間見える。二月二十七日付「読売新聞」の「芝居だより」欄には、横浜、京都、大阪、長崎で公演後に渡仏と記され、この時点で旅程は概ね決まっていたのだろう。しかし、劇場側から公演期間の延長要請なども相次ぎ、予定どおりには進まず、音二郎の動向や各地の劇場関係者が到着を待ちわびる様子が折にふれて報道されている。

羽衣座を打ち上げた翌三月二日夜、南座公演のため川上一座は京都に到着、各自宿へ向かい、音二郎は円山の待合茶屋「梅が枝」に止宿する(幕の内外)『京都日日新聞』三月三日。その翌日

には、福井茂兵衛と藤澤淺二郎が着京し〔楽屋風呂〕『京都日出新聞』三月四日）、福井は小堀の「光吉」、藤澤は繩手の「川中」に宿を定めた〔幕の外〕『京都日日新聞』三月五日）。いずれも待合茶屋だろうか。一座が京都へ入ると、先斗町や祇園などの最前線から各俳優へ膝隠しや暖簾が贈られ、俳優と芸妓、幫間の接触を報じる新聞記事が頻繁に目につく。伊臣眞『観劇五十年』（『観劇五十年』刊行会、昭和十一年）に明治期の演劇と花柳界との関係について、こんな記述がある。

明治初年の芝居と云ふもの、存在価値は甚だ乏しいものであつた。当時一般人の唯一の娯楽機関なる芝居は頗る安価に取扱はれ其内容、脚本や演出に卑俗な点があつたり俳優には不品行の者が多く地方出の品性高潔と自称する人々には一概に猥雑だと排斥され花見に行つて酔倒れるのは公然でも観劇に行つたことは隠蔽すると云ふやうな気分が充満して居た。

〔…〕当時はこんなにも観客層の範囲が狭かつたので興行者側では大衆を第二として、常顧客を第一に獲得せねば打算上不利と見て花柳界を常顧客とすることに努め、その網から観客を吸収し來つた。（一〇八頁）

また「明治の中期までは娼妓が赤緒熊兵庫の髪で襦こそは被ないが伊達巻帯を借物の羽織に押隠くして見物し、吉原××樓様御連中などと表口にピラまで貼出して棧敷に張見世其儘のデモを敢てしたのは珍しくな」（同頁）かつたという。花柳界は主要な観客層として重んじられていたのである。明治期劇壇と花柳界の近

接性については、貞奴をはじめ同時代の女優及び女役者の多くが花柳界出身であることなども含めて別稿を期したい。

南座でも「洋行中の悲劇」と「武士的教育」が上演され、三月四日付『京都日出新聞』に四日から十日まで毎日午後四時開場を伝える「川上派新演劇／音二郎優及帰朝一行出演」の広告が載つた。棧敷（四円七八銭）と場（二円七八銭）は二日目まで完売するなど前評判は上々、初日は「正午頃より看客が木戸に詰掛け札を売り出す二時迄は非常の混雑にて往來は出来難き程」（『楽屋風呂』『京都日出新聞』三月五日）の好況を呈した。ふだん新演劇を観ないという観客も足を運び、三月六日には『京都日出新聞』の金子静枝らが組織する観劇団体の嚶々会をはじめ、高崎親章京都府知事と内貴甚三郎同市長や「新地芸妓百余名」が観劇し六千円の収益が上がつたという（同三月八日）。その後も連日大入が続き、三月十三日まで三日間、延長されることになった（同三月十日）。
そうした中で三月十日付『京都日出新聞』の投書欄「状さし」にこんな記事が載る。

○僕は去る六日南座を観劇した道具建の斬新な趣向と俳優の熱心に演じて居るので近來新しい新演劇を見たそれですべて改良と云ふ事に力を尽して居るやうであるが引き替へて依然としてお茶子や係りの奴の看客に対して「チマへ」だとか「ライ」だとかの失敬な言語や拳動をする事だ此様な事は以後嚴重に取り締りをして改良をするが可い是は敢へて南座丈でもないが少し入りのよい芝居のお茶子は皆さうだ僕は観劇

毎に是丈が癩に障る

(城北天涯散史)

投稿者は、川上一座に新演劇の進境を見いだし、舞台内容だけではなく劇場環境や演劇をとりまく風土そのものの改良も求めている。伊原青々園の前掲評に照らせば「枝葉の改革」に属するものでもあるが、音二郎が各地にもたらした波及効果の一つとして、観客側に演劇改良の必要性を再認識させたという点を挙げることもできるだろう。

南座公演中に、次の大阪中座で新脚本「長谷部信連」二幕と「武士的教育」を上演することが決まり(「芝居だより」『大阪朝日新聞』三月八日)、舞台と並行してその稽古がはじまった(「楽屋風呂」『京都日出新聞』三月十日)。ここで「洋行中の悲劇」が外れたのは、大阪では二度目となる帰朝公演のために重複を避けたいのだろうか。新聞掲載の「長谷部信連」の場割は「三條高倉御所の場、同中門外奮闘の場、六波羅問注所の場」(「芝居だより」『大阪朝日新聞』三月八日)で、その役割は「長谷部信連(川上) 太夫判官兼綱(藤澤) 三位局、前右大将宗盛(福井) 源三位、頼政(松本)」(同三月九日)など、察するに『平家物語』巻四「信連」の劇化を企図したものと見える。

「長谷部信連」は治承年間(一一七七〜八〇)が舞台のため、道具や衣裳は「時代調べの必要あれば十分に故実を正し歴史的感興を起させん事に趣向を凝」(「芝居だより」『大阪朝日新聞』三月九日)らす手筈となった。三月十一日には、藤澤浅二郎が「参考のため治承年間の鎧、兜、烏帽子等」(「楽屋風呂」『京都日出新聞』三月十三日)について教えを乞うために、近代京都画壇の

雄、日本画家の鈴木松年のもとを訪ねている。その成果可否は定かでないが、道具や衣裳などは「都べて宇治平等院の宝物を模範とする」(「芝居だより」『大阪朝日新聞』三月十二日)ことになったという。

四条大橋に近い南座の芝居茶屋「柳屋」の二階で稽古が行われたが、「甲冑其他を時代に合さんとするには勢ひ新調せねばならず夫には少くも十数日を要するを以て到底中座の興行には間に合はず去ればとて不完全なる扮装にて登場し識者の笑ひを招かんと心苦しければ外国渡航までに古実正して新調する事」(同三月十三日)と決まる。この時点では、第二次海外巡業を見据えた演目に「長谷部信連」が選定されていたようだ。そのため中座では「武士的教育」に発端的一幕二場(「台湾虎仔山麓」「福浦敷島討死」)を加えて通し狂言とすべく、急遽、藤澤浅二郎が筆を執ったのである。

藤澤浅二郎は、明治二十年代から川上一一座の中心俳優として舞台上立つ傍らで脚本執筆も担当し、秋庭太郎は「新派最初期の作者」の一人に藤澤の名前を挙げている(『日本新劇史』上巻、理想社、昭和三十年、三〇七頁)。新演劇において、作者を兼ね、座内で文芸面を任された俳優は多い。時事的な即時性や、現実自分たちが身を置く状況や立場に応じて舞台をつくる身軽さが彼らの身上でもあった。日程に余裕のない巡業の中で、期間延長の要請や急な公演依頼を受け、時に新作上演も検討できたのは、現場主義的な演劇生成のありかたと同時に、作者と演者の近接性も大きく関わっていたといえる。

三月十五日に川上一一座は大阪へ移動し、音二郎は南区難波新地

五番町の宿屋兼待合茶屋「栄亭の控家」に仮居を構えた（芝居だより）『大阪朝日新聞』三月十七日^⑩。中座の初日は、三月十六日。前述のごとく「武士的教育」九幕の昼夜通し公演で、三月十五日付『大阪朝日新聞』掲載の広告には「初日ヨリ惣幕出揃」とある。二日目には三代目中村福助（高砂屋）、初代中村霞仙、嵐巖笑ら歌舞伎俳優が観劇し、祇園新地の芸妓が五十名の団体を組んで来場する（無署名「中座の川上一座」『大阪毎日新聞』三月十七日）など、その活況は止まることを知らない。帰朝公演の皮切りとなった朝日座評を『大阪朝日新聞』に寄せた古愚庵なる人物が中座評も同紙に執筆しているので引いておこう。

前の合同演劇は洋行帰りの川上が仲間に対する自分の信任を問ふたやうなものにて演劇としては何の趣味もなく随つて成効の点も見えざりしが今度のは欧米を跋渉して共に酸辛を嘗めたる連中の上に藤澤福井松本野崎といふ此仲間の立者を加へて幾分か新意匠を応用し短時間に一部の劇を首尾全く見せる事として少しく改良の実を挙げたるものと見て差支へなかるべし舞台端の反照を始め演劇中は舞台のみを明くするなど遠からずして一般の演劇にも行はるべき事柄にして色電気の応用の如きは之より大いに研究すべきものと思はる（…）

（中座の川上劇）三月二十五日

三月二十六日に千秋楽を終えた後、一座は「神戸にて道具調べをなし余日あれば三日間『信連』其他の附立総稽古をなし四月九日神戸出帆の郵船に搭乘」（芝居だより）『大阪朝日新聞』三月

二十四日）する予定だったが、翌日付の同紙同欄に以下の記事が載る。

神戸の興行（二日間）を打つ前に長崎の眞客に迎へられて同地へ乗込み五日間興行する事となり其狂言は一番目が『信連』二番目は『千本桜』の御殿場を眼目として之に椎の木場、鮎屋、御代落（新作）などを加へたるものにて是は九州各地にて興行する狂言なれども下稽古の爲め長神両地にて興行する事になりしなり（…）

中座での上演が中止された「信連」に加えて「千本桜」（義経千本桜）が演目に挙がつており、二番目は「御殿場」を中心に「椎の木場」「鮎屋」を抜粋、さらに「御代落」という場を新たに書き加えた。渡欧後に「千本桜」を上演する計画は、二月末には決まつており、音二郎が忠信、貞奴が静を演じる予定だったという（芝居だより）『読売新聞』二月二十七日^⑪。再渡欧のメンバーも発表され、音二郎以下、前回同様の顔ぶれに加え、貞奴の他に五名の女性（石原なか、小山つる、濱田たね、西尾とし、太田なみ）、藤澤浅二郎、そして「学術研究、演劇取調べとして劇評家土肥春曙」（無署名「新俳優洋行の顔触」『都新聞』三月二十六日）が同行することが決まっている。

三 長崎舞鶴座

東京、横浜を経て、京阪で舞台を重ねた川上一座だが、ロイ・

フラーとの契約による再渡欧の時期が間近に迫っていた。先行研究の多くが帰朝公演の道程を京都乃至大阪で止めており、白川前掲書の年表には長崎舞鶴座の記述があるものの、内容は「渡欧前の稽古芝居、演目不詳」とされ、渡航日は四月六日となっている。渡航日について山口玲子は四月十日に讃岐丸で神戸を出発とし（『女優貞奴』新潮社、昭和五十七年、一〇九頁）、茅ヶ崎市美術館『音二郎没後一〇〇年・貞奴生誕一四〇年記念 川上音二郎・貞奴展』展示図録（平成二十三年）所載の年表には四月十日に「讃岐丸にて門司港出発」と記されている。それらをふまえ、本節では従来未詳だった長崎公演の実態を明らかにしたい。

川上一座は三月三十日に大阪を発ち、汽車で長崎へ向かった。藤澤浅二郎は一旦東京に戻り、福井茂兵衛は自身の公演で大阪に留まったため、二人は同道していない。長崎での上演演目は、前述した「信連」と「千本桜」から一転「武士的教育」に変わり、それまで福井が演じていた占部初子を貞奴が勤めることになった。京都の人々は「男女混交芝居なれば定めし未亡人みち子即ち藤澤役は中村仲吉勤むべし」（幕の内外）『京都日日新聞』四月二日）などと噂したという。中村仲吉は先に掲げた新座員、石原なかのこと。中村芝翫（四代目カ）に師事して後に中村翠娥と名のつた女役者で、主に関西で活動し、九代目市川団十郎門下の市川九女八（糸八。守住月華とも）と東西を二分する人気を博した（山口前掲書一〇九頁）。彼女が川上一座に合流した経緯は不明だが、他に素人の女性数名を同行させたことも含め、音二郎が女優養成を視野に入れていた意図が窺えよう。

三月三十一日夜、座員を先に長崎へ向かわせて、音二郎と貞奴

は郷里の博多で下車した（無署名「川上音二郎丈と貞奴」『福岡日日新聞』四月二日）。音二郎の親類という行町の「萬利」に投宿し、翌日「墓参及び故旧の訪問をなし目下教楽座に於て施工中なる萬利追薦俄踊へ臨み一場の挨拶を」（『雑報』『九州日報』四月二日）した後、同夜の内に長崎へ赴く。この博多滞在中、音二郎は長崎の後に博多でも公演する約束を同地の興行師と交わしている。

長崎では、舞鶴座初日に先立つ四月二日、迎陽亭で「披露会」が催された。音二郎は開会に際して「今晚は文学者芸者及び役者の会合なり西洋に於てはアナチスト（Anachist）と称して是等三種の芸人は同等の権利を以て同席するを得れども日本には猶ほ未だし是れ全く後二者の修養不足なるが故に修学者と同席するを得可き新俳優を造らんことは余の素願なり記者諸君は遠慮なく当興行の芝居を批評せられんことを望む芸者諸君に望む所は余の儀にあらざる諸君の紳士のお座敷で雄弁を揮はる、お序でにコンドこの度同業の川上が当市に乗込んで居りますから宜敷お引立を願ふ」（米国芝居博士「川上演劇披露会景況」『鎮西日報』四月五日。傍線引用者）と挨拶している。右のコメントが宣伝目的であることは言うまでもないが、同時に「芸者及び役者」が当時共通の状況に置かれていたことを示しており、両者の間には職業的な連帯意識も存在していたのだろう。音二郎は、西洋では「同等の権利を」有する文学者と席を同じくすることを望み、それは俳優の社会的地位の昇格を意味する。だからこそ、音二郎は帰朝直後、大阪の文学者の集いにも積極的に参会し、貴顕紳士の観劇を乞うたのであって、俳優学校設立の提案も意図は同根なのである。

さて、事前の宣伝にも余念のなかった舞鶴座における川上一座の上演演目を、四月三日付『鎮西日報』の無署名記事「川上派の新演劇」から以下に掲げる。

▲児島高德皿山越、院の荘（洋行土産上幕）

川上音次郎出しもの

▲武士的教育

▲芸者と武士（洋行土産下幕）

貞奴出しもの

帰朝後初めて、正しく「洋行土産」として、第一次海外巡業の主要演目である「児島高德」と「芸者と武士」が上演され、貞奴が日本の舞台に立ったのである。

川上一座初の長崎公演である舞鶴座は、明治二十三年（一八九〇）十一月二日、新大工町の官有払い下げの土地に建てられ、柿落としては大阪から初代市川右団次（後に斎入）、嵐吉三郎一座が招聘された。同座は、文政十一年（一八二八）竣工の八幡座とともに明治期の長崎を代表する劇場といわれる（若浦重雄『長崎の歌舞伎』若浦重雄、昭和五十五年）。帯谷重則『松泉帯谷宗七伝』（帯谷重則、平成十一年）によれば、劇場設立のために瓊浦劇場株式会社が組織され、当地の実業家帯谷宗七が社長として経営に従事し、株主には各界の有力者が参集した。総檜造り、舞台の間口十三間半、吊り天井、二重廻り舞台、せり上げ、十三間半の花道などが整えられ、防火設備も完備し、一千坪の敷地に建坪六百坪と非常時の避難場所も確保したという。収容人数三千五百

人の大劇場だった。明治三十四年の公演時に音二郎と帯谷宗七は意気投合したようで、以降も音二郎は舞鶴座の舞台を踏むことになる。帯谷重則は「渡欧後の事として英仏の赤毛物が珍しいので好評を博し、日本の舞踊に和洋合奏の新機軸を出し又電気・瓦斯併用し照明の効果を狙ったりで革新演劇の名に相応しく大喝采」（前掲書一八頁。傍線引用者）と記し、前者は「武士的教育」、後者は「芸者と武士」をさすと思しい。

同時代評としては、米国芝居博士なる人物が『鎮西日報』に「川上新演劇漫評」を四日にわたって寄稿している（四月五、七、九日）。評者は「児島高德」について「外国漫遊中欧米の各所に於て丈の出しものとして演ぜられたる由なれども僕の米国に於て観たる時は高德にはあらずして楠正成を撰み出されたり（…）西洋人は言語に通ぜざる為め桜井駅に於ける楠公父子訣別の長文句に徒らに欠伸を催すのみなればなり」（四月五日付）と評しており、アメリカ公演を現地で見たいようだ。このことは「芸者と武士」について「二役娘道成寺の白拍子花子は欧米に於て大喝采を博し是なくば川上芝居は見られぬと亜米利加のボーイ連が感心したる位価値ある役なり（…）僕の見たる時は今度のは異なり優は古来の道成寺を踊りたるが」（四月七日付）云々という記述からもわかる。

米国芝居博士の劇評は、基本的に俳優一人ひとりに対する芸評である。ここでは川上夫妻のものを紹介しておく。

▲川上音二郎の一等軍曹桜田雄吉、児島高德の如きは川上十八番の一とは云ふもの、頭底旧派俳優のものにして世には高

徳に扮して川上以上に出づる者は極めて多し然れども西洋劇の如く今日實在の人間社会の狀態若くは出来事を最も自然的に描き出し普通の人間らしき仕打を以て能く觀者を感じせしむる点に至ては新派俳優独占の長技なり是を以て桜田雄吉に扮して川上を凌駕する者は恐らくは今日日本の俳優社会にはなからん
〔川上新演劇漫評〕四月七日

では、貞奴はどうか。評者はまず「武士的教育」の占部初子を次のように評している。

死に瀕せる父の病室の隣室に陣取り手代侍女等を集めて音楽の稽古に大騒動を為し番頭桜田に訓誡を与へられ欧米男子の女子に対して極めて礼儀あるを説き出して桜田と争論する所
一は西洋婦人の表面の半面を描き一は其裏面の半面を描く其衝突するは理の当然のみ初子柳眉を逆だて「貴女の室内に案内も乞はずして進入するは不届なり去れゲツトアウト」と絶叫する所能く最下等なる西洋婦人の品性を写し出せり此所等は優が洋行したる効驗なり由来日本婦人の洋装したる風姿は極めて不格好なれど優は洋行しただけ美事に着こなされたり

〔川上新演劇漫評〕四月九日

一方「芸者と武士」については「西洋人は日本婦人と云へば銘酒屋の地獄女か或は世界の到る所に散在する下の関天草若くは熊本辺の下の女ばかりを知れるのみなるに日本でも別嬪との評判ある優の顔色を拝見したもんだから無闇に有難がつたる訳にて芸道

を以て評判された訳」ではないとし、その技芸は「芸者の踊の如く小さく踊られ舞台には穴があき勝なりし〔…〕鬼女に變じてよりは元來顔に凄味ある女だけに凄味は充分に在り素人の芸としては上出来なるべし」(同前)と述べるに過ぎない。

評者はアメリカで演劇を見慣れているらしく、貞奴らが舞台上立つことも自然に受けとめているから、長崎の一般觀客と反応を同一に捉えてはなるまい。音二郎、貞奴ともに旧來の歌舞伎様の作品は殊更評価するまでもない印象だが、むしろ「武士的教育」のように現代的な登場人物の造形についてはその技量に認めている点に注目しておこう。

舞鶴座の千秋楽は四月八日。川上一座は翌日長崎を發ち博多に到着した。教樂社²⁰の公演が予定されたが〔雜報〕「九州日報」四月十日)、計画は実現しなかつた。既述のごとく川上一座はロイ・フラ²¹との契約があり、その日限は間近であつた。

彼地の興行を來る六月十日よりとし若し違約するに於ては十萬円の違約金を払ふこと、なり居るを以て十三日門司發汽船讚岐丸によりて渡航すれば六月七八日比には彼地到着の予定にて十分約を踏むことを得る筈なるも先方より支払ふべき旅費は第一回に其幾分を送り來り居れども未だ残りの第二回の旅費送り來らざるを以て若し十三日迄に其送金が着せざる時に於ては己を得ず旅費の着するを待つて次回の便船に乗して渡航するより外仕方なく爾うなると此処五六日間程の日子を得る訳なれば其節は当地に於て五日間程興行の積りなりと云ふ然るに若し又其送金か今明日中にも着するとすれば契約も

あることなれば十三日門司発の讃岐丸に搭して是非共渡航し
当地の興行は見合せとなす筈なりといふ右の次第なるを以て
当地の興行は明後十三日を過ぎざれば未だ何ちらとも公然発
表する訳には行かずと (『雑報』『九州日報』四月十一日)

一月には前金として四千円を受領していたが、旅費やその他雑
費は未だ送金されておらず(無署名「川上一座の興行に就て」
『福岡日日新聞』四月十一日)、一座も劇場側も待つ他なかった。
公演に向けてピラも作成して備えたが、十一日朝に送金確認がと
れ、即時中止と決まる。音二郎らは、十三日に門司港を出航する
讃岐丸に乗船するため、同日中に博多を出発(無署名「川上は興
行せず」『福岡日日新聞』四月十二日)。その情報は「十二日午後
五時五分馬関発」の電報で東京にも届いたのだった(『読売新聞』
四月十三日)。

おわりに

三か月余の強行軍的な日程ではあったが、音二郎は各地で厚遇
され、その中で第二次海外巡業に向けた試演も行い、再びヨーロッパへ旅立っていく。明治三十四年における川上音二郎の帰朝公演
をたどると、同時代劇壇に対するその求心力が看取できる。音二
郎がこの時期に洋行帰りのふれこみで東京、京阪神、そして長崎
を巡演したことは、観客の側も含めた自発的な演劇改良の機運を
醸成し、各地へ広めた点でも史的意義をもつといえる。また新演
劇の各地域での上演及び受容状況等を考える上で一つの有効な

視座となりうるだろう。

注

- (1) 拙稿「明治三十四年の川上音二郎・序説——大阪朝日座における新演劇大合同の周辺」(『立教大学日本文学』第一〇八号、平成二十四年七月)、同「川上音二郎と竹越與三郎」(『大衆文化』第八号、平成二十五年一月)。
- (2) 拙稿「川上音二郎と竹越與三郎」(注1に掲出)も参照のこと。
- (3) 東京に佐藤歳三は同行しなかったようで、荒川少尉は山本嘉一となっている。
- (4) 二月八日付『都新聞』の「梨園叢話」欄に「第一丈夫の決心、第二道夫の病状、第三ハイカラの令嬢、(第四)教会の閣上、第五道夫の懺悔、第六砲台の建築、第七恩義の短銃、第八雄吉訊問、第九空中の格闘、第十風船の成功」とある。また市村座の辻番付(早稲田大学演劇博物館蔵、ロ23-00054-0077)も参照した。
- (5) 江見水蔭「私に見た川上音二郎」(『芸術殿』昭和七年十一月)も参照した。
- (6) 井上精三「川上音二郎の生涯」(葦書房、昭和六十年、八七〜八八頁)も参照した。
- (7) いくつか例を拾うと「川音の宿は円山左阿弥、福井は川端四條明梅、藤澤は未定であるが先斗町梶亭より福井へは膝かくし、新地婆芸妓よりは幕を贈り又川音は職一本といへども謝絶するといふ見識であったが南座興行に就ては膝かくしが無ければ不都合といふので新地の婆芸妓より贈る事になった」(『楽屋風呂』『京都日出新聞』三月二日)、「川音は女房奴の不在中は浮

気をしやうと言つて居たがそれから再び夜福井、藤澤と共に祇園新地の川なかへ行つて芸妓を呼んだが僅におまん(五十八年)久吉(四十二年)浅吉(六十七年)三名の外来無かつたので一昨夜更に川なかへ登様しておまん、久吉、浅吉、小梅其他芸舞妓二十七名と替間光吉、梅八、夢助等を招き午前三時まででも底抜け騒ぎを遣つた(同三月六日)といった記事が散見する。

(8) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 京都篇』第三卷(八木書店、平成九年)に番付を典拠とする公演情報が載る。

(9) 三月十四日付『京都日出新聞』の「楽屋風呂」欄も参照。白川宣力編著『川上音二郎・貞奴 新聞にみる人物像』(雄松堂出版、昭和六十年)の年表は「長谷部信連」と「武士的教育」を中座の上演演目と記すが、正しくは「武士的教育」のみ。

(10) 無署名「執達吏川上音二郎の旅館を襲ふ」(『大阪毎日新聞』三月二十三日)によれば、この家は中村芝雀の旧宅で「旅人宿兼待合稲田方」とある。

(11) 拙稿「明治三十四年の川上音二郎・序説」大阪朝日座における新演劇大合同の周辺(注1に掲出)を参照のこと。

(12) 第二次海外巡業渡航前の動向に関しては、山口玲子「女優良奴」(新潮社、昭和五十七年、一〇八―一〇九頁)も参照した。

(13) 白川注9前掲書は三月二十六日付「都新聞」の無署名記事「新俳優の顔触」を参照と記すが、三月二十九日付同紙「梨園叢話」欄の「長崎舞鶴座に於て三日間倫敦興行の稽古芝居をし門司より乗船する事にしたり」という記事にも拠ったものか。

(14) 米国芝居博士「川上演劇披露会景況」(『鎮西日報』四月五日)中の石原なかの談話には「私は芸名中村仲吉で故芝翫の弟子でございまして是れでも京大坂ではチツタア人にも知られた

女優でございましたよ永く中絶して居りましたがドーシタはづみか又た飛び出して今度は洋行迄致しますよ一体曾我の五郎とかきられよ三とか云ふ物が私のゾでございませうか明日の女役はどふしたらよからふかと実は心配して居ります鯉昇米花桂二桂三峰姉などは姉妹分でございませう」とある。

(15) 詳細は不明。井上注6前掲書に「興行で博多に来て音二郎は、行町の万利旅館、中島町の松島屋などに泊まっていたが」(一一九頁)云々とある。

(16) 四月三日付『九州日報』の「雑報」欄に「博多教楽社に於ける萬利追薦二輪加は非常に大入を極め」たとある。また音二郎は四月一日に福岡日日新聞社を訪れ、記者に以後の予定を話している(『川上音二郎文と貞奴』『福岡日日新聞』四月二日)。

(17) 注11に同じ。

(18) 『歌舞伎』(明治三十四年五月)の「歌舞伎日記」には「▲舞鶴座(四月上旬) 前「武士的教育」 中「児島高德」 切「道成寺」川上」と記載がある。

(19) 同書所載の年表「舞鶴座」興行関係(明治・大正時代)に明治三十四年の川上一座公演は掲出されていない。

(20) 川上音二郎と教楽社の関係は武田政子・狩野啓子・岩井眞實「博多興行史 明治篇(九)」(『歌舞伎 研究と批評』第四十一号、平成二十年十一月)も参照した。なお無署名「川上は興行せず」(『福岡日日新聞』四月十二日)には四月十日の来博とある。

(い)とつりゆうき 本学兼任講師